
てすと

模倣刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
てすと

【Nコード】
N3453X

【作者名】
模倣刀

【あらすじ】
投稿テストです。

テストということであげてます

はじまり

人を試す。

いくら、教師というものであるとコレは良いことなのだろうか時々思う。

確かに、人を仕分けるというのに試験というのは安易であり、簡単だ。

点数さえみていればいいのだからね。

ただ、点数だけで分けてしまうとその子の勉強ができると言うこと、記憶力がいいということ、それに対する成績をつけてしまう。

……いや、こういうことをだらだらと書いてしまうと終わりが無いので端的にいおう。僕は個性というものを評価してあげたいと、そう思うのだ。

真面目ないち

その子は真面目である。

「せんせーさよならー」

いや、普通な生徒であるというべきなんでしょう。そして、普通であるということは教師としてみていると普通な事である。と言い切れる。

「せんせーせんせー。暇だねー」

「そうか？つていうか暇なら帰りなさい。」

「えー？せんせーこんな可愛い子が話し掛けてあげてるっていつのにつめたーい」

「ああはいはい。そうだねー。暇なら課題あげようかー？」

「せんせーさよならー」

と、僕になつくでもなく、ほどほどの距離にいる子が真面目である。と言える子なのだ。

「おお？」

「え、あ、先生。」

特に何もなく、学校帰り、参考書を読んでいる生徒を見掛ける。というか、自分のクラスの生徒であるのだが。

「そういえば、公立志望だっけ？」

「そうですね。もう悪あがきともいえる時期ですからね。」

「そうかそうか。」

「先生って、生徒の事って気にしてます？」

「んー。一応二年間教えてきたし、志望するところについてくれたらいいなって思ってるよ。」

「そうですね。いや、そうですね……」

「どうかした？」

「いえ、特に何でも無いですよ。」

それでは、そうやってその子とは別れた。

どこどこにもあるような会話。真面目な子というのは思い詰めると怖い。そう思い知るのもう少し先のお話。

おふざけなに

「まっわるー！いや、まだまだ回るよ！むしろゲーシが振り切れちゃつよおおおおおお！？」

「せんせー。いつも通り騒がしいです。アレ。」

「いや、先生でも休憩時間までは何も言わないからね？」

「せんせーから許可もおりたしどんどんまわるよおおー！ひーはあ
！！」

「……先生」

「いや、ごめん。」

通常運行でもずれている子はいる。特に誰それとはいわないが、いることはいる。

この子の場合、目立ちたいというよりも楽しんでもらいたいというのが第一にある。だから、行動しながらホントに迷惑を掛けたならきちんと謝れる子でもある。

「せんせー。せんせーも回ってみない？」

と、ふらふらになりながら声を掛けてくる。
当然ながらそんな馬鹿げた事は

「手を広げて全力で回ればいいんだな？」

する。

当然、注意して欲しそうにしてた子は白い目でみてくるが、二人で立ち上がらして強制的に回したら最後には笑ってくれた。そして、学科会議に遅れて、主任にねちっこく怒られた。

いつか、絶対革靴の踵に画鋏さしてやる。歩くたびにかちかちなつてタップダンス、もといタップウォークさしてやる。

とか、まあそんな話は脇に置いておく。
人を笑わせるという意志を持ち行動する。

そんな少女がいる。自分へと返ってくる評価は奇人変人の類、だがそれすらも矜持として持つというのはなかなか辛いものだと思う。

まあ、案外本人が気付いて無いのかも知れないが

「ねえ、先生。」

「ん？どうかした？」

「いやー、せんせーって、先生だけど、せんせーっぽくないよね？」

「それは、威厳がないということか？」

いや、まさかそんな？これでも清く正しく馬鹿馬鹿しくをモットーにしているわけで

「威厳つて、そりゃせんせーには元から無いでしょー。そういつことじゃなくてさ。あんまり怒らないよね」

「まあそりゃ p t a がうるさいからな」

どやって顔で見ると、そうかもだけどそういつことじゃないんだよなー。なははって笑われた。

「まあ、それは置いといて。ここに呼ばれた理由って分かってる？」

「んー。何となくだけど、一応。」

「んじゃ手っ取り早く話してくれる？」

「はいはい。えっとねー、つい、見てたら確かめてみたくてさ。ぐっと押したらつるつといつちゃったんだ。いやーあれにはー」

「まで。何の話だ。」

「え？教頭のヅラめぐりについてじゃないの？」

「違う違う。失踪事件の方だよ。全く、そんな面白そうな時にいなかったとは。」

「あはは、そっちかつ。いやー、指導室に呼ばれるなんて思わなかったからさ。」

そう言って笑う。ちなみにいつやったのか聞くと昼休みの終わりとのこと。教頭に聞くように言われたのが昼休みの最初だったことを考えるともったいないことをしたと思う。もうもう少し一緒にいたならば！

いや、ねちっこいからやっぱやだな。

「んで？何か知らない？」

「残念ながら何も。まだ三日目だからねー。何も噂は聞いてないかな。」

「まあそつだよなー。」

「でさー、先生。先生って生徒の事好きにとかならないの？」

「それこそ、ptaが飛んでくる話だな。生徒はそりゃ可愛いよ。ただ、あくまでも上の立場ってところから見えて話だけだね。」

「ふむ、そういうのは好きだよ。勿論下の立場って意味からだけだね。」

えへへーって笑いあう。こういう風に笑って言い合える関係。生徒、教師間であったっていいじゃないか。

委員長さん

「先生。これ、どうするんですか？」

「ん？なに？」

「文化祭の出品について、ですよ。」

「あー、いつまでだっけ？あ、やっぱり答えなくていい。次のHRでそれやるから、司会もろもろよろしく、委員長。」

わざわざ職員室まで来て言ってくれる。次のHRすること決まっていなかったから有難い。

「どうした？委員長？まだ何かあった？」

面倒臭そうな目、所謂白い目で見てくる。

「いえー？先生の適当差加減にビックリしてるだけですよ？」

えー？普通だと思っただけだねー。

「教師ってこんなもんだよー？」

「いえいえ、今まで見てきた先生に先生みたいな人いませんでしたから」

おー？凄いもんだね、当たり前引き続けるとは、いや、外れかな？っていうと、駄目だ、この先生。っておっしゃって教室へと帰っていい

った。

いやはや、責任感が強い、いや、人の手助けをしたがるお節介かきっていうのもいい個性だと思っただけだね。

「今日も休み、欠席無しです先生。」

「うし、HR始めるよー。今日のは文化祭について、司会は委員長がやってくれるんで、後はよろしく。」

そういつて委員長から出席簿を預かる。

「先生に無責任にも任せられたので、始めます。一応先輩達が優先的に飲食店をやるということなので、私達は飲食店は出来ないと思っして下さい。」

「えーっ。それって猫耳メイド喫茶とか出来ないの!？」

そう言つて、周りを笑わせる女の子が一人。男子がやると引かれるのにこの差は何だろうとちよっと思わないでもない。

「そもそもそんなのは却下です。」

そう言っつて白い目を向ける委員長。

「だったら、お化け屋敷とかどうだろう？定番だろ？」

そついう男子。うん、ある意味模範回答だよな！。

奇をてらわないでどうするの！？とか叫んでるこがいるが少数派。簡単に淘汰され、クラスがお化け屋敷でいつかとなっていく。悔しそうな顔をしているな！って思ったら、何か思い付いた顔をして最後には引き下がっていった。教師としては何も見ていない。個人的に何をするのは楽しみにしておこう。

「にしても、先生。」

「何？」

「この時期から文化祭の準備って速くないですか？」

「5月でしょ？文化祭9月だし、交流深めるって意味でこれぐらいから行つ見たいだね。」

「成る程、ありがとうございます。」

いえいえ、そう返して、またお願いねーって言ったあたりでチャイムがなった。

因みに、お化け屋敷になったようで、まあ普通だよな。

遊びに行きたいし

「さよならー。」

「あ、ちょっと待って。」

「何？早く出たいんだけど。」

男子を呼び止める。課題出さないとヤバイよーって伝えるがのらりくらりとかわされる。

「何か決めるってときには意見を出すのに、自分のことだと適当だよね。」

「そりゃね。ゲーセンなりカラオケなり、行くためには放課後まで時間を掛けて決めたくないからね。」

「ほう、そりゃそうだ。だが、課題ださないと後々自分に返ってくるぞ。」

「そんなときはそんなときになってから考えるよ。もういい？約束あるんだけど。」

そういつて分かれる。いい子何だけどねえ。快樂主義というかなんというか……

とまげんじろう

「せ、んせ……?」

「ん?どうかしたのー?」

「いや、そのさ、せんせって、凄いやね。」

「えー?ほんと?どこらへんがって聞いてもいい?」

「あー、いや、何となく。そう思ったただけなんだけどさ。」

「うううほわほわしてる子もいる。」

「ふふふ、私かい?気にしたら駄目だよ?」

右手を顔の前に掲げてる子がいるが気にしないでおく。本人がそう言ってるし

「まあ、先生みたいな人にならない方がいいかも知れないよ?他の先生方に、あの先生はーとか言われるのって地味に辛いからね」

はあ、とか言ってくれる。後ろで、先生酷い、無視するなんて!?
よよよ、とかいってる子がいる気がしたけど気のせいでしょう。

「せ、せんせ？何して、るの？」

あはっ

弟のむ

「姉の担任ってあんだだよな？」

「君は……ああ、この間失踪した彼女の弟か。」

「そうだよ！何で、あんたはそんなに冷静何だよ？心配じゃないのか？」

「いや、心配だよ。」

「じゃあどうして！と騒ぎ続けるので職員室ではなく別の部屋に行こうと指導室へと連れていく。」

「あれから一ヶ月。何も無しか？」

「何も見つからないね。」

「ホントにちゃんと聞いてるのかよ」

「勿論。聞いても情報が出てこないんだ。」

「くそっ！姉ちゃんどこいったんだよ。」

姉想いな弟って感じだよね。

可愛いよねえ。

きりきりな

あの先生のクラスになってから、人が一人居なくなっただ引きこもりが一人でたらしいよね。

みたいだね。引きこもりってあの子でしょ？たどたどしかった喋りの子ー

そうそう、そんな感じの子じゃなかったのにねー

うーん。しゃべり方ひとつ取ってみても誰か伝わる。言い方一つでも結構特定出来たりする。これってやっぱり個性っていうのが現れているんだろうねえ。なんとも面白い話だよねえ。

さてさて、次からは少し時系列を正していこうかな。

ああ、誰か追い詰めきつてくれないかな。

探偵役は弟君かな？

いや、もしかすると……

気付くと黒いのが出てた

「やつほーっ。もしかしてこのクラスの人ー？」

「ああ、そうだが……クラス間違えてるぞ。」

「へ？こっつて3組じゃないの？」

「3組は3組だが、2年のな。」

「ふえっ！？失礼しました！！」

そういつて慌てて教室から飛び出す私。初日からやつちやつなんて！

とは、思うものの恥ずかしかったけど取りなせる範囲！って気合い入れ直して改めて教室に入る。

「おはよー！！」

初日ぐらい誰か早く来ない？

響く声に切なくなつた私でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3453x/>

てすと

2011年10月19日09時21分発行